

翻刻『名筆傾城鑑』(上)

翻刻の会

一、底本には、関西大学図書館蔵の七行七十六丁本を用いた。

上演 宝暦二年(一七五二)三月廿三日初演。大坂竹本座、座本竹田出雲掾。

作者 吉田冠子、中邑閨助、三好松洛

奥書 竹本大和掾宗貫、竹田出雲掾清定

版元 山本九兵衛、山本九右衛門、鱗形屋孫兵衛

丁付 名 壹 名廿一 四ノ巻 四ノ六 四ノ八 四ノ九 三十 名ノ卅一 名ノ三十二 名ノ三十三

名七十六終

二、底本を忠実に翻刻することを原則としたが、次のような校訂方針に拠った。

1 本文は文字譜を手掛かりにして、適宜改行を施した。ただし、道行・景事の類等では改行しなかった。

2 各丁の表・裏の終わりは、丁数の数字とオ・ウの略号を()で示した。

3 仮名は現行の字体に統一した。ただし、感動詞、送り仮名、捨て仮名の類以外の、本文中の「ニ」「ハ」「ミ」は

「に」「は」「み」とした。

4 漢字は、一部の異体字を除いては、原則として通行の字体に統一した。

5 漢字・仮名ともに、誤字、脱字、当て字、仮名遣い、清濁は底本の通りとした。

6 特殊な略体、草体、合字等は現行の表記に改めた。

7 疊字は、平仮名は「、」、片仮名は「、」、漢字は「々」に統一した。ただし、「く」はそのまま残した。

8 文字譜の類はすべて採用し、本文の右傍の適切と思われる位置に翻字した。

9 底本の不明箇所は適宜同板の他本で補ったが、特に断らなかつた。

三、本文の翻刻は、次に掲げる翻刻の会(学部学生の研究會)の会員によってなされた。

小林美奈、石川千里

文字譜、改行、本文の最終確認は山田和人が担当した。

※ 翻刻の続きは次号に掲載の予定である。

なお、関西大学図書館には、翻刻の許可を御快諾賜まりました。記して感謝申し上げます。

（山田和人）

敦賀の遠山
花洛の葛城 名筆傾城鑑

遣羽子の段

君が心は今つく。はねの空に。こがれて物思ひ。一ト二タ三イ四ウ世の中も。あら玉の春。にぎくと。佐々木六角殿の都の館。姫君いてうの前のお慰。奥にしらべの爪音に合す。女中の羽子板の。ゑにしをこめて。つくばねの峯よりおつるみな。の川。屋敷ぞ。恋のさかりなる。

なふく瀧野殿これ見やしやんせ。此羽子板の上臈のやうに。常住男の傍に吸付て(一オ)居るは。浦山しい事じやないかいの。わしらがやうに屋敷の奉公勤る身は。髪の有尼同前。男はふる程有ながら傍へ寄事もならぬとは。嵯峨に居て松茸くはぬ様な物じやと打笑へば。

緑殿の言しやる事はいの。絵にかいた男が何しのそれ程恋しい事。今の世の業平とは狩野の四郎次郎元信様。器量一チ番絵一番。そして氣立テのよさそふなほんに男のきつすい。御家老名護屋山三様のお取次キにてお出入。姫君いてうの前様一ト目御覧なされてから。お氣がくはつと上つて。とても(一ウ)男を持たらばあの殿ならでと思ひ詰て御座なさるゝ。殊にあなとは先お御台様のお子にて。男は望次第と殿様からゆるしが出てあれ共。元信様の口がかたうて今に埒が明かぬはいの。けふは殿様お留主を幸。元信様を呼付ヶこちらが寄てすゝめる筈。皆ぬかるまいぞ。アイく。合点くとお主思ひは餅の形。よい男見る下心ちらめく花の咲匂ふ。女同士ぞさはがしき。

程なくお次に足音トして狩野々四郎次郎元信。姫君のお召シにて参上とはのめく声。そりや彼人よと女中達。餌を見付けた

る小鳥のごとく。(二オ) 俄に置さはくく。春風と俱に入ル広間。いため付けたる上下モより生れ付いたる繻子鬚男。若菜は心得たばこ盆。前に置しなふり返りちよつと顔見て入跡へ。

瀧野が持くるせんじ茶の恋しり顔に見るめもと。鼻からさきへ氣を付ける。高杯の菓子緑がいそく持出る。消もせぬ火を入替るお茶汲かへんと持て行。男にはこぶ足かくく小すみへ寄てはひそくと。見れば見る程よい男。あんな男の下着に成て。肌引付てゐたいといへば。わしやあの人の帯に成て。腰にひつたり抱付たいといふも有。あつたら男の悪性らしいに似合ぬ。かたいのが(二ウ) 玉に疵とつぶやきさ、やくそしりはしり。我事なめりと氣の毒さ。咳に紛し灰吹をめつたにたゝいてゐる折ふし。

十八九なる脇話の後結びも。格別に。銚子盃前に置。しとやかに手をついて。私はお姫様のおぐし上藤ばかまと申ス者。しみぐお咄し致しませいと御事ぞや。御存の通り先しみだいのお姫様。殿様からおゆるし受けて殿好。つれないはそなた様。いづぞやよりいろくとお乳の人お局。口のすい程すゝめてもどふでもお受けないとの事。おいとしや姫君は余りの事に恋こがれ。私をおねまへ召しやい藤ばかま。せめての事にそちなりと四郎二郎と名を付けて。心ゆかしに抱て寝よそちもおれを抱キ(三オ) しめて。姫かはいひとふてくれともがき事がおいとしさ。とんと下紐打とけて。ねる程だく程しめる程ふたりの心せく計。どちらぞ男に成りたいといふても泣ても叶はこそ。なふ大名の手わざにも有ルべき道具の足ぬのは。ひよんな物とおむつかる。自にいなせの返事聞切り参れとお使。わたしも一チ分し立ッやうにお返事なされと述にける。

元信額を畳に付ケ冥加に余る仕合ながら。度々お返し事申さごとく諸傍輩のそねみと申。欲心に紛るゝ事世間の嘲り。よし御機嫌に違ひいか様に仰付ケらるゝとて。御恨候まじ御請とては成がたし。よき様にお執成頼入ルとぞいひ切たる。ハ、アにべもなう埒明いた。いかにとして(三ウ)も上エつかたへ左様な慮外申されまじ。少シ物に品付ケて。始メり約束の女房が有ルと申なば。お胸のはるゝ事もあらずながら。其女房は何者とごどをつかるゝ念シの為。今こゝで私と夫婦かためゝの盃して。とつと前から藤ばかりと契約有と申さば。いかな主でも大名でも此道計はせんが先シ。此談合はどうござんしよ。ヲ、幸イ望む所。サア盃仕ッらふ。イヤくく。わしとても飯にはいや。仏神かけての女夫ぞや。せいもんく絵筆を取らぬ法もあれ。かうじやくと抱付ク近カ比嬉しい忝し。是祝言の盃と一ツ受けて元信に。妻のさかづきいたゞく作法。規式はかたうと四海波。姫中がうたひつれ。姫君様の御祝言。三(四オ)国一チとぞ祝ひける。四郎次郎合点行ず逃んとするを拘留。藤ばかりとは仮名ぞや。自こそはいてうの前。せいもん立テの盃いやはならぬとの給へば。イヤ我等の名ざしは藤ばかり。外に妻は是なしと猶意路れば姫衆。そんなら本の藤ばかり早ふくと呼出す。お茶の間のきりか、五十余りのあつ化粧。三平じまんの口べにしなだれかゝるゑしやく顔。是が何シの藤ばかり。しやちらごはい皮はかまと。どつと笑ひのどやくや紛れ無理に。手を取奥の間につきせぬいもせとへ成給ふ。かゝる所に表テの方殿の御帰館と呼はる声。家老不破ノ道犬名護屋山三春平。御迎ひに伺公すれば。六角左京の大夫義(四ウ)賢卿。ゆうくと座につき給ひ。

参勤の間事故なく首尾よく御暇給はる。明日帰国すべき間其旨残らず申渡すべし。扱将軍家の御用に付き。絵師雲谷に申

付くる事有。呼出せとの仰に従ひ。長谷部ノ雲ノ谷御前に出。

御用いかにと伺へば。此度將軍義輝公風流の御申し立チ有て。日本名木の松の絵をあつめ給ふ。中にも奥州武隈の松は。

日本第一の名木にてかき得る者なし。義賢こそ名高き絵師を数多扶持し置ク由。此図を画せよとの御詮。土佐の將監光信は鍛練の絵師なれ共。子細有て勘当致し置ク事。將軍家迄も聞へたる事なれば彼しには申し（五オ）付ケがたし。雲ノ谷が力にて画得べきやと有ければ。ハア、成程、武隈の松。天晴画キ認め差上ラベしと。事もなげなる返答に。山三かぶりをふりイヤ。かるはづみの請合其意得ず。能因法師も武隈の。松は跡なく成にけりと詠じて。今の世に誰レ有てしる者なき名木。そちは其図を覚へて居るか。イヤ覚へは致さぬ。惣じて絵の法は絵そらごと、て。有り体には画ぬ物。武隈の松は名高き名イ木。然れば松の形は違ふ共。何ンで有ふと見事に画たが武隈の松。今の世にない松なれば。そふでないとがめる者もなし。イヤ、そふは成まい。武隈の松でもない物を武隈の松（五ウ）といふは。將軍家を偽るといふ物。其了簡では心もとない。嗜めされと一口にやりこめられて赤面す。

うしろの襖押しひらき。四郎次郎御前にひれふし。委細あれにて承はる。武隈の松の義は。我等も兼て形を見たく存る所。夜前ふしぎに天満宮の靈夢を蒙り。武隈の松を見んと思は。越前の国敦賀の浜辺へ赴べしとの御告。今日此義を承はるも旁深き天神の御引合せ。あはれ此絵を我等に仰付ケられなば。彼敦賀に赴き松をとくと見とけて。此度の御用にたち申スべしと思ひ。入てぞ願ひける。

道犬あざ笑ひ。武隈の松は奥州にこそあれ。（六オ）越前へいて見とけるとはみすくの作り事。お家の絵師雲ノ谷を指

置キ。やうく此比お出入の素人絵師。太切の御用承はらんとは慮外千万シ。お次へ立テとねめ付くる。イヤくお待ちなされ道犬老。四郎次郎が夜前シ天満宮の靈夢を蒙りしは。元信に画せよとの神の指図疑ひなしと。聞て義賢打うなづき。神の告に従ひ四郎次郎に申付くる。早く越前に赴き。松を画指上クべしと。座を立チ給へば元信は当座の面目身の大慶。絵のあらそひも墨絵にてかざる詞の彩色や。底の心の黑白も。白きを後チと花の雪解る。春こそ三重へのどかなれ（六ウ）

第貳 松の段

越の海辺に。けいの浜氣比の社の境内に。天満宮の御遠忌迎一チ万燈の大法会貴賤も。爰にきさらぎや。日和も霞春霞。軒端ふく茶の香にめで。往来も足を休床。植かへて。育る花や誰レをかも。しる人にせん。此里の。松と成しも。親の為うられ。かはれて北国に。名を遠山と呼れしも。人にのばれの恋の坂おろしあゆみの道中は。花の立木の其儘にぬめり出たるごとく也。

ヲ、イく二上り調子の声高く。是はく大夫様。なんぼ程結構な夢を御らうじたやら。いさみ（七オ）す、んでの御来迎。夢合の振舞やら又はお祥月也。八百五十年の法会とて。家内の禿衆を此やうに拵へ。揃のか、笠しつかいしめち山の茸狩。やもふ爰が天神様じや。コレく禿衆。かんまへて夜も眠らずと手習を精出し。千話文のあがる様に。又あなたを頼めば無美の難シを受ケぬげなど。いへば弁弥がヲ、おかし。わしらが事は構はずと。おまへのか、んす事を頼んだがゐいな。ム、おれがかくとは何をかくぞ。ハテ引舟の若葉様に付キ合て居てから。むかひの琴柱様にふられて。大きな恥をか、んしたじやないか。ノフ勝ッ野三弥。それくこちらもようしつて居るぞへ。コリヤゆるせく。弓矢八幡大明（七

ウ) 神さらく皿八覚がない。そりや皆無実といふ物じや。ソレ見さんせ。たつた今いはんした。わしらが事よりおまへの身に。随分恥をかくやうに頼んだがゑいわいの。ホ、ホ、ホ。こりやあの子らがいふ通り。皿八様シ嗜んせく。コリヤ術ない。テモチつぽけな形りをして。此皿八に一本さしたな。ゑいく此意趣ばらしは待て居や。水揚の時おんもさま誤らしてこまそふぞと。口は達ッ者で手はもちく。ヤ申しく大夫主。おまへは子供衆連シ立ッて早ふお参り。我等は又其間お料理を申付ケて置ませふ。ヲ、それく。わしも大事の神参り祝ふて酒を過していなふ。サア皆おじやと引連ッて宮居の方へ皿八は。茶屋が葭簀へ別れける。

狩野々四郎(八オ) 次郎元信。高嶋家の仰を受ケ。越前の国けいの浦へと旅羽織。我レは笠きて大小の。柄にも袋させる筒丁稚がこしの白山も。雲にうつらふ。月代の。湯の尾峠の孫ぢやくし。盛こぼしたる花重かさねくし旅籠屋が。情もあつきかなべの。敦賀の浜にぞ着にけり。

ヤイ哥之助。道々もいふ通り。奥州武隈の松といふ名木は。古へ能因法師さへ跡もなしと詠たれば。名のみ残つて印シなし我是を画頭はし。誉レをゑさせ給はれと天満宮を祈し所に。武隈の松を見んと思は、。越前の国けいの浜辺に行べしと。あらたに霊夢を蒙れ共。それは陸奥爰は越路。何をしるべに尋ぬべき。(八ウ) あはれ里人來れかし物とはんと呼はる声。皿八聞クより走り出。所の者に御用とは扱は都の粹様な。さればく。御覽のごとく都の老松を尋る子細有。此所にも名高き松の候らめ。教てたべと有ければ。此敦賀の町に名高き松の候が。若も左様の成ル程く。それこそ尋る名イ木よ急いで見せて給はれかし。ヤアく。早あれへ御帰り。我等は酒の首丞相みき天神を三拝九拜。是にお待チと言捨て。又もよしず

へ入にけり。

高き名の松の門ト立チ立なれて人待チ顔に立帰る。

遠山を見て哥之助コレ申し。見事な物がそれそこへ。それくといへば四郎次郎。ヤア何シと松が見へたか頭はれたか。写

とめんとふつと立ッ拍子にはた(九オ)と行当り。是は扱松かと思ふてはまつた。本シの松を尋んと行違ふ。袖をひかへて

コレ申し。私は遠山といふ傾城。京の廓の松様シ達と競さんすがふかくの至り。しかし不酔なお方には松と見られて嬉しう

ない。杉といはれて腹立タず桑の木共櫻共。あほうの木共見さんせと。むだ言なしの言捨は田舎よねとて笑はれず。

ヲ、御機嫌そこねしは御尤。げにく松とは大夫様。我等はわるう心得て不調法な御挨拶。まつぴらくお詫言。是を御縁

ンにお近付キ。私は狩野々四郎次郎元信と申ス者。去ルお方より武隈の松の図を仕れとの仰。則チ天満宮の夢相に任せ。此所

へ参つて名有ル松と尋しを。大夫様と取違へ是は(九ウ)かうも有ふ事。御了簡次手にお付合イも数多也。願ひの叶ふ便り

もあらば。御世話頼ミ奉ると思ひ。入てぞ語らるゝ。

ム、扱は四郎次郎元信様にてましますな。恥を包も時による何を隠さんわし事は。土佐ノ将監光信が娘なるが。父は一ト

とせ勘氣を受ケ今浪人の憂渡世。此身に沈むは申さず共推して泣て下さんせ。扱とよ只今宣ひし。武隈の松の図は。土佐

の家の秘伝なれば洩す事は叶はね共。此比ふしぎや天神様の夢の告。狩野といふ人下るべし。武隈の松を伝授せよ父が出

世の種ならんと。見たはまさく正夢と。語りもあへぬに四郎次郎。天を礼し地を拜し。懷中の絵筆絵絹を取(十オ)出

し。中々他言は致すまじ御伝授なされ下されよと。余義なく頼めば。ハアいかにも伝へ申さんが。親の赦しもなき中ちに筆

取ル事はいかゞ也。ハア、何とせんかとせんと案じ煩ふ折もあり。

申シく大夫様。一ッ遍尋て居やんしたと。立歸る禿共。ヲ、それよ思ひ付いたり。あのお供の人の立ち姿を。松の立ち木に準へ幸い子供が着た笠を。松の枝葉の笠となし爰にて移し見せません。それにて写しとめ給へコレそな奴殿。爰へござんせ雇ひましよ。コレかうくと知ラすれば。ナイく。手ふる頭をふる年ふる松の。床几にかゝる腰付きに。千年の緑写せしは作意。へなりける次第也。

先づ歌人シの見立テには。一ッ本ト松をニッ木共三木とつらねし言の葉の。(十ウ)それは老木の松がへなれど写す。へ若木の。やつこのく。此膝のふし松のふし。前へちすりの下枝にぬつと出せし片足は。慮外千万千貫枝。筆捨枝や久かたの天津。乙女のかたくま枝や腰かけ。枝の禿松。勝野弁弥がさす笠は。月にさはらぬ枝々の。さゞれ小枝の松かけを。サア沖こぐ舟の帆の。ほの見へて。さすかいなには寿福の枝。納る手には不老の枝。たれて雪見のひかへの枝。これくく。ずつとのびたるながしの枝。三弥うこんに花之丞。松は非常の物だにも。伝へし心の。色はなをさながらせいでうくとして。松の生キ木のいきくと若やぎ。立る其ふぜい。

狩野は一点がひなくかきつらねたる筆勢は。いづれを写し絵いづれを立(十一オ)枝紛ひつべうぞ見へにける。

元信絵図を押シ戴。扱々思ひ寄ぬ御方に廻り逢。秘蔵の名木を写し取ル事。偏に天満宮の御引合せ。有がたし忝しと巻納め懐中し。早速帰リ本懐をとげ申スべし。此恩には御身の上。わけて父御の御事も受ケ取申さん。万シ事の礼は国本トより心もせけばおさらばと。立上るを引とめ。神の御告に任せしからは恩にはかけず去ながら。伝授は伝授縁は縁。先キ程

より申せし通り打つゝく夢のふしぎ。若と、様シがもとの様に御出ッ世をなさるゝか。又は我身に此年シ月思ふ願ひの叶ふかと。心にいさむ神詣。ふつと見初メし殿御ふりいとしらしやと思ふから。親の免さぬ口伝の絵教た心を推量して。せめて一言可愛と。いふ（十一ウ）て足納さしたがよいとじつと取ル手をしめ返し。わりなき中のぬれ始め。

傍にましくし哥之助。こりやあなたのが皆尤。旦那一番シ誤つてお託くと突やられ。こける拍子に抱付キ。互の思ひ武限の松をゑにし始メなる。

八はい機嫌の皿八が。やつちやゝ遠山様。奥から始終見て居たが笠の御趣向どふもく。子供みやげの団子の花笠天神花。是から始メた事である。天神様の縁シ日に御縁のふかいお二人中。此分シでは済されまい。料理のかげんも蔑やが座敷禿衆お床を合点か。サアゝお出を幸いに名木ならねば四郎次郎。とくとお礼も申ス為然らばちよつとお盃。そちは爰にといふしほのひかれ。誘はれ入にける。

跡をながめて哥之（十二オ）助。アノ旦那とした事が。いかに筆先キが強いとて。野でも山でも達者なわる。壺の印を押る、謂が今しれたと。ぶつゝきゝ腰さげの。たばこ一ぶく床凡のはし。見はらす氣比の涙伝ひ。不破が郎等犬上団八同しく三八。跡を付ケくる鳥井の馬場先キ。とつくと見すましコリヤ三八。男傾城の四郎次郎め。ばらしてしまへと伴左殿が頼まれた。此三八は雲シ谷殿から頼まれた。先ツ二才めからかた付ケんと。點頭くコリヤ奴。天神の開帳にいつち当つた作り松。両枝切て切さげると。双方一度に切かくるを。持ッたるきせるで丁く。たゝき落され両方より。掴かゝる腕先キ握り。海賊めらが手てんがうこりや何ひろぐ。ヲ、松の趣向面白かつたそれで（十二ウ）うぬめを。ヲ合点。今ま一千度

見たくばまつかうく。かふ捻るが捻松猿松。かふく上るが見こしの松。そこを這すがそねの松。腰骨ぽんと吹上松ころり。くと松の木臼。尻餅ついて二人はほうく。落たる刀拾ふ間にだんびらひらく。コリヤたまらぬ。叶はぬ赦せと犬上兄弟逃ヶぼへしてぞ立帰る。

いづく迄もと哥之助刀提かけ行を。コリヤ待テ々と四郎次郎。遠山も諸共に留ても留らぬ血氣の若者。漸に抱留。さつする所道犬親子が廻し者に極つたり。血をあやするは神への恐れ。けがのないこそ互の珍重いさ帰らんと身繕ふ。名残尽せぬ遠山が。離がたなき。こしちの雁さらば。くの暇乞。コレ。必外に内義様持つてばし下さんすな。奴殿頼ムぞへ何が扱く。天神様より大夫様追付おふたり(十三才)れんりの松。島台持つて取結び。千年万年々々年。とち付キ引ッ付松脂の離ぬ中を引わけて心。残して。三重へ別れ行

第三 硯の段

近江に武名。高嶋の。佐々木義賢の御台四時花御前。姫君銀杏の前終日の絵の御稽古。此比ならひしかる書キを母君のお慰と。姫よせてふくさ紙薄き墨絵もこい中の。四郎次郎元信に思ひそめたる絵筆のくまのしどけなき。女中の遊びぞ。やさしけれ。

御台つくく御らんじて。ヲ、けいこに精が出る程有ッて。此かる書キのおし鳥は見事そふな。歌にもおしの妹背と詠夫婦中のむつまじい鳥。姫も追付々よい聲君取ッて。いもせの(十三才)中をむつまじう。初孫見せて下されと仰嬉しくいてうの前。自が絵の上つたも師匠がよさ。ナア姫共と四郎次郎元信と。わりなき中を絵によせて。母にしらする絵そらご

と。

局地色ハル お傍そばに小こさし出て。ほんに元信様は氣立けだてテがやうて。なんくせない殿どのぶり。したが弟子でしも弟子でしによる。今藤いまふじばかまの書かきやつた此松茸このたけのこはざんげな形なり。ほんに不形ふがたりな松茸たけのこじやと。どつと笑わらへばみだい所ところ。イヤく絵書えしよキ花結けびは姫ひめござのもてあそ遊び。姫の氣に好このく事ことならば。絵は愚何おろかななりと。心任こころまかせと姫君の恋路こひぢをしつたる詞遣ことづかひ。なさぬ中でも子を思おもふ。親おやの心ぞ有あがたき。

折せから狩野しよのの四郎次郎お召めしシによつて參まゐ上うへと。申上まへクれば。ヲ、其元信用事もとしんようじ有あつて召寄よせたりと。硯すずりの箱はこをうやく敷しきク立出たちで給たまふ義賢卿ぎけんけい。(十四オ)竹たけの間の長廊ちやうらう下した。小腰こわしをかゝめ。四郎次郎しやうじやう袴刀はかまの差さぶり迄まで。室町様むろまちやうのひんぬき男おとこ。遙はるかさがつて扣ひかゆれば。姫君ひめきみは氣もそゞろ。打うちもよりたきふぜい也。

義賢ぎけん元信げんしんに打向うちむかひ。其方そのかたが業わざにもあらぬに。松の図しづめを首尾しゆびよく仕りたるによつて。早速さつそく名護屋山三なごやさんさんに持もッ上うへ洛らくさせ。義輝ぎき公こうの御上覽ごじやうらんに備そなへしに。御悦喜斜ごえきせならずと。山三さんさんが方かたより告つげしらせり。是以こゝつて汝はなが働出はたらきかしたりと。仰おんに元信頭げんしんづゑをさげ。御意ごいの通り画工くわこうにあらぬ某たれ。武隈ぶくまの松の図しづめを首尾しゆび能仕よくりお、せしも。全く神かみの御恵めぐみと。申上まへクれば。ヲ、神かみシ妙めづなる申まをシ分ぶん。其方そのかたが狩野しよのの名字ななづなは若も。宗茂むねしげの末すえならずや。ハ、ア仰おんの通り先祖せんぞは頼朝公よりともに仕つかへし狩野々助しよののすけ宗茂むねしげ。親狩野おやしよのの祐清ゆうせい迄まで將軍家しやうぐんけに仕つかへしが。某幼少たうせうの時傍輩はうばいの(十四ウ)讒言ざんげんによつて父ちちは浪人なみのり。一ひと種類の余力よりよくによつて人と成なつたる某たれ。殿どのの御意ごいおもき故元信げんしんが身みの上うへを。申上まへするも先祖せんぞの恥辱ちじよく。面おもて目めもなき御物語ごものがたりと。詞ことに氏うぢを頭づゑはせり。

ヲ、さも有あなん。某たれが先まづ祖そは佐々木ささきの四郎高綱しやうたかなら。代かかはり時移ときうつりしが。昔むかしは源氏げんしに肩かたをならべし狩野佐々木しよのささき。さすれば其

方も恥しからぬ氏系図。定めて某が家に硯有ル事聞及ばん。石キ中に小龍住ンで不断硯に水た、へり去によつて雲龍の硯と号。先キ達ツて將軍より御所望有ツて指上ケしに。高鳴の家の重宝故硯は義賢預り置ク。先年我家の画工。小栗宗丹土佐ノ將監。此硯を達ツて望ミ口論に及び。兩人共に勘当せしが。此度其方松を書キ得し譽あれば。硯を拝見させんず。又是成ル襖は小栗土佐が（十五才）筆を争ひし竹の林。此雲シ龍の硯にて虎を画。神シ慮に叶ふ名筆の。奇特を末ッ世に顕はせよと。仰にはつとひれふして。かゝる希代の御硯に拙き筆を浸さんは。恐れ有レ共辞するは却て殿への慮外と。硯引寄せ。墨すりながし。懷中より用意の絵筆取り出し。小栗土佐は古今の名画。其上を書よごすは憚有ルににたれ共。其業ならぬ元信と。襖戸に立向ひ。さらくくくと墨絵の虎。でんもく雷威の眼コの光り。いかり毛いかりふいかり爪。生ケるがごとく書ければ。雲龍の硯の水吹キ上くまき上ケる龍虎のいどみ。元信は我ながら。奇異の思ひを義賢みだい奇特を。かんじおはします。

かゝる所へ不破の道犬。御前シ間近く立出。某殿の御名代として將軍義輝公に御め見へ。御所旁の次第一チ々（十五ウ）聞シ召シ分られ。三好国長を以ツて仰渡されし子細は。お館の大吉事。姫君銀杏の前美人の聞へ隠しなきによつて。義輝公御ン部家に指置カれんのよし達ツて御所望故。指上ケ奉らんとお受ケを申シ罷り帰り候と。聞キもあへず。何々娘いてうの前を指上ケんとお受ケを申シ帰りしか。ハアはつと計に当惑の。色めは顔に顯はれり。

地色中
となつ御前御気色かはり。是は又道犬共覚へぬ疎忽。譬義輝公直キに仰有ル逆も。一ト先ツ帰り其旨を申聞せ。お受ケの御返答は国元トより使者を以ツて申上ケんとなぜいやらぬ。夫レ程の分シ別がなふて。家老職が勤るかと。宣へばあざ笑ひ。

其弁へなき拙者にてはなけれ共。義輝公の御意もおもく。万シ一若君やどらせ給へば。主君シは天下の舅君。御家来の我々迄大慶に存るから。早(十六才)速にお受ケを申歸りたるが。此道犬が誤りか。疎忽かな。兼て身共が申たは爰の事。紛伴左衛門に姫君を娶せ。家国をお譲有レはかやうな事も出来申さぬ。何シとそふではござらぬかと。是を事に高嶋の家のくつがへす道犬が。底工こそ醜しき。

奏者役罷り出。先シ年シ小栗と口論仕り。御勘シ氣を蒙りし土佐ノ將監光ッ信。御勘シ氣御免シの願ひと申シ玄関にひかへ候と。申シもあへぬに義賢卿。エ、につくき將監。身が赦さぬに館へ踏シ込ム慮外者と。いかりの氣色に御台所。イヤ自迄は度々の願ひ。何とぞ御赦免なされては。ならぬ。主を直下に見る故に。我意にほこつて某を踏ミ付けるか。老人たけ今日はやゆるし置くと。道犬にあて付ケずんと立ッて入給へば。

サア姫こちへ元信も。休息せよとあいにくしく打つれ(十六才)奥へ入給ふ。

つ、いて道犬つツ立上り。將監めにか、つて某迄とはしり。モウ勘当の詫も叶はぬといへ。身が取持て雲谷を御奉公に出した上。素人絵の青二才迄お出入して。館は絵師であへかへせば絵書はいらぬ。門前からばゐまくれとにらんで。へ一間に入にけり。

人なき透を窺ひ。姫君奥より走り出。のふ逢たかつた四郎次郎。今そなたも聞通りひよんな事がおこつて来た。去ながら義輝様の仰でも。そなたに別れ都へ迎いきはせぬ。必見捨てたもんなや。やいのくと元信に取付すかり泣給ふ。

後に不破の伴左衛門立聞ぞ共四郎次郎お心さしは有がたけれ共。私お家へ御奉公申せは姫君様とは主従。世の人口もいか、

なれば。元信か事思し召シ切て。義輝公へ御宮仕（十七才）はお家の為と。なためすかする其中に。伴左衛門は鎧にて。雲シ龍の硯引よせく。刀の鐔にてはつしとわる。音に驚キふり返れば。伴左衛門すつくと立ち。コレ姫君。おれがいふ事聞ずに。よう二才めとうまい事をさつしやるの。そしてまあ御重宝の硯を。色事仕めが土足にかけて。大ばちあたりと手に取上ケ。ヤアこりや二つにわれて有。將軍より預つたる雲龍の硯。わり人は狩野の四郎次郎。科は遁れぬ覚悟せいと。立蹴にはつたとけすへられ。みすく我科ならね共。密通せし身の誤りに。詞なければいてうの前。其硯割たは自。元信の科ではないと。泣詫給へば。ア、こりやおかしい。二才が科を身に引請。かばいたていやらしい。ヤア親人はおはせぬかお家の大事がおこつた出あへくのとつてう声。義賢御夫婦道犬雲（十七ウ）谷あはてふためきかけ出れば。したり顔にて伴左衛門。是成ル狩野めが姫君と。不義をひろいで雲龍の硯。コレ此様に打割たと。聞よりはつと義賢卿。て。しばし詞なし。

姫は涙にくれながら。過て御重宝の硯を割たはいてうの前。自を罪におとし父上のお怒をなだめてたべ母上。ヲ、氣遣ひ仕やるなど。いへどみだいも一向に。案しわびさせ給ひける。

道犬はせ、ら笑ひ。お預りの硯をわり。姫君を疵物にした青二才。將軍への申ひらきに打首。じたい狩野めをお館へ引入れた。山三から大きな科人シ。打チ首はおろか逆ばつつけがよからふと。日比ふわなる道犬がもつてまいるぞ。にくさげなる。義賢いかりの声高く。ソレ兩人共に縛り上ケ。一ト間へ押シこめうごかすな。山三は又四郎次郎を導入たる誤りあれば。在京の帰りを待直に勘（十八才）当と。仰の中チより伴左衛門。飛か、つて元信をたぶさ掴んでぐつとねぢ付ケ。さげ緒たく

つて高小手にいましめ。姫君諸共引立く一ト間の。へ内へ入にける。

みだいの所は指寄て。此硯割たのが必定姫に極まらば。おまへは真実いてうの前を。ヲ、サクどい。ハアそれはあんまりどうよくななされかた。御重宝の此硯。たとへ七珍万宝のたからにもせよ高が硯。それ割たが誤りて現在我子が切られうか。いかな邪見な親にもせよ。我子にあてる刃が。そもやそも有べきか。人ならぬ鳥獸。さへ。子に別るればらはたを。さざくになつといふ。姫殺さいで叶はずば。自をまあさきへ。殺してたべと計りにて。姫をかばひ義を立ててかつはと。ふして泣給ふ。

義賢耳にも聞入ず。ヤア将監はなきか。光信。くどめさる、声ハア(十八ウ)はつと白洲に走り出。御勘シ当の将監を俄のお召シは。御勘氣御赦免下さる、か。ハア、有がたや忝なやと地に鼻付ければ。

イヤ勘シ当は赦さぬ。御勘当御赦免なきに。某をめさる、はヲ、其子細よつく聞ケ。義賢が子逆は先シ腹のいてうの前。国郡にもかへがたきひとりの娘。天晴よき智取ッて老の樂しみと思ふ折から。元信をふかく恋したふ。元来四郎次郎は系図正しき男。我カ聲として高嶋の家を譲らんと思ひの外。道犬が舌先によつて。姫を將軍へ指上ケねばならぬ時宜。思ひあふたる姫元信。何とぞ永く添せた。心をいためる時しも。雲龍の硯をわつたる其誤りを言立テ。手討チにすると押しこめ置ケ共。何シと我子が殺されうぞ。姫をひそかに落す了簡。コリヤ其方(十九オ)が勘当ゆるさぬは爰の事。他人となつて我娘の養育頼むくぞと。御シ指添をぬき出し。是は是武士の魂なれ共汝にあたふる。某に成かはり。此硯のわれと割合してくれるは。汝と山三計ぞと将監が手に渡し。

姫がいくにさまよふ共。尋出して元信と夫婦になし。娘に迷ふ義賢が。心を休めてくれよとて。子故にもろき目に涙たち。兼て見へ給へば。みだいを始メ將監も。御心をさつし入。俱に涙にくれけるが。

見るかげもなき光信に。御一ト腰と硯のわれ。下し給はり姫君の御身の上。頼むとの御仰はハ、ア、冥加に余る身の面目と。申し上ければとこなつ御前。斯お心をくるしめ給ひ。又御持病さしおこらは。悲しみの上の悲しみ。お気休めに先ッ奥へと。すゝめ申せば義賢も。硯の片われ手に持つて。(十九ウ) われても末にあふせをば。頼むと計にてみだい。諸共入給へば。將監もお暇給はり。御門シの。へ方へ出て行。

早程もなく不破雲谷。元信を高手小手にいましめ引ッ立テ出。伴左衛門声をあら、げ。元信を門前よりぼつばらへと義賢卿の仰なれ共。儕を生けて帰しては後々迄も恋の妨。此所にてばらして仕廻はん。ナア雲谷。ヲ、某も意趣有元信。なぶり殺しがヲ、よかると。椽柱にぐつくと猿つなぎ。ヲ、よいざまくと立チ蹴にけすへる折こそあれ。

お迎の為腰かけに扣へ待ッたる哥之助。かくと聞よりかけ入て。思ひがけなき伴左衛門がありがみつかみ。白洲へどうどのめらす。雲谷たまらず切かくるを引ッばづし。首筋つかんでまつ倒に投ケ付ければ。ヤア狩野が奴め遁すなど。ゆんめてより不破(二十オ) 雲谷。拔連く切てかゝる。心得たりと哥之助。拔キ合せ切結び。あなたへ追ッ詰こなたへさ、へ奥庭さして戦ひ行。

跡には元信心をもみ。哥之助が身の安否。いかにと計のび上り。しだんだふんでもかく程。次第に。しまる縛り縄。エ、むざくとはしぬまい。我カ一ッ心をこめて書たる虎。ふしぎを頭はし元信が。危難をすくへと観念し。右の肩に齒を立ててふ

つつく^{くひ}と喰やぶり。口に我身の血をふくみ。画^{あがけ}る虎に吹かくれば。忽^{たちまち}精血加^{せいけつ}はつて千里もかけん勢^{いきほ}ひ也。

道犬^{地ハル}は姫君の行方尋廻りしが。ヤアよい所に四郎次郎。きやつめから仕廻^しへんと。刀ぬかんとせし所^{地ハル}に。俄^{コハリハル}に吹くる風さ

はぎ絵^下にかく虎は形^{かたち}をげんじ。牙^{きば}をならして吼^{なへ}かゝる。道犬^ウ一チゑん合点^色行ず。必定^{ひつてい}是は元信が画^{あがけ}る虎。魔術^{まじつ}をもつて

(二十ウ) 働^{はたら}くよな。いで組^{地ハル}とめんとはせ向ふ。虎はたけつて爪^{つめ}をときあたりをけたて三重^上へもみ合しガ。

もとよりふしぎの猛獸^{もうじう}。道犬^{ハル}か襟^{あし}たぶさ。ひつくはへ打^うちかたげくるりく。くるくくくるりく^{フシハル}と持つて廻り。一トふ

りふつて投^なけ付ければ。堀^{へい}を打^うちこし敷^うキ石^{いし}に頬^ほをすつてぞ打^う付けける。

虎^{地ハル}はいさんで元信のいましめをかみきり。背^せを指^さむけてそばへたり。

元信^{地ウ}やがて心付^{はから}キ袴^{はかま}の。も、立しほり上。ひらりとこそは乗^{のり}たりけれ。虎^{ハル}は千里の足早く風^{かぜ}にうそむく身もかろく。堀^{へい}も

築地^{ついで}もおとりこへ飛^とこへはね越^こかけり行。

姫^{地ハル}は奥より走^はり出。これのふ待^{まち}つて四郎次郎。自^{みづか}らも諸^{もろ}共に。つれてのいてたもいと。涙^{なみだ}ながらに元信^中の。跡^{あと}をしたふて

落^お給ふ。御有^お様そいたはしき。

敵^{地ハル}を追^おつて哥之助館^{やつかた}の内へ取^とてかへし。四郎次^中(二十一オ) 郎様元信様と尋廻^{地ハル}れど行方しられず。扱^さは主人も落^お給ふか。

ヤアく^{ハル}今は心やすしとのつたる刀^やを踏^{ふみ}なをし。待^{まち}間程^{ハル}なく。伴左衛門雲谷諸^中共。手^ての者引具^{ハル}しどつとかけ出。ぞうり^中摺^{すり}

の哥之助^{地ハル}。遁^のさしやらしと追^おつ取りまく。ヤアしほらしきうんざいめら。師匠^{しせう}にさつかる筆先^{ハル}の切^きれ味見^{あじ}よと。いはせもあ

へず伴左衛門^{ハル}。物^{もの}ないはせそ討^うつて取^とれと。拔^はき連^つれくおめいてかゝれば哥^中之助^ウ。ゑいく声^{こゑ}にて追^おつつまくつつ。切^{ハル}まく

り切^色はらへば。詞^ウには似^にぬ伴^{ハル}左衛門コリヤ^色雲谷^{ハル}。死物^{ハル}狂ひにかまふなど。足もしどろにむら^フくばつと逃^{フシ}ケ入^レば。

ヲ、くく^{地ウ}さも有^{ハル}らんさも有^{ハル}べい。儕^{ハル}等^{ハル}が筆^{ハル}の命毛^色取^{ハル}ういで残念^{ハル}シ去^ウながら。逃^{ハル}ケたを幸^{ユツ}イ奴^色めも。力^{ハル}ヲを絵^{ハル}筆^{ハル}くま取^{ハル}リ

筆^合。其^{ハル}筆^{ハル}先^{ハル}きに譽^{ハル}有^{ハル}リ。天下^{ハル}に。一^{ハル}筆^{ハル}ツ名^{ハル}も高^{ハル}き。主人^{ハル}に。追付^{ハル}キ奉^{ハル}らんと跡^{ハル}を。したひて。三^{ハル}重^{ハル}へかけ^{ハル}り行^{ハル}

第四 吃^{ども}の段

実^地じうくんの。一^{ハル}りやう山^ウ野^ヤにはびこり草木^{ハル}を踏折^{ハル}。田畑^ウをあらす事^{ハル}斜^{ハル}ならず。近郷^{ハル}の百^{ハル}性^{ハル}声^{ハル}々に。三井寺^{ハル}の後^{ハル}から藤^{ハル}

の尾^{ハル}迄^{ハル}は見届^{ハル}た。此山科^{ハル}の藪^{ハル}かけへ逃^{ハル}ケこんだに極^{ハル}つた。草^{ハル}に疵^{ハル}付^{ハル}ケずた、き殺^{ハル}せぶち殺^{ハル}せと取^{ハル}リ々々わめき評^{ハル}定^{ハル}す。

庵^地の内^{ハル}より刀^{ハル}ばつ込^{ハル}實^{ハル}戸^{ハル}押^{ハル}シひらき。ヤア騒^{ハル}がしい。何者^{ハル}じや人の軒^{ハル}下^{ハル}。打^{ハル}テ殺^{ハル}せとはあはれ者^{ハル}。但^{ハル}シ夜^{ハル}盜^{ハル}押^{ハル}シ入^{ハル}の手引^{ハル}キか。

此庵^{ハル}リを誰^{ハル}しと思^{ハル}ふ。土佐^{ハル}ノ将監^{ハル}光信^{ハル}といふ絵師^{ハル}。某^{ハル}は門^{ハル}弟^{ハル}修理^{ハル}之助^{ハル}正澄^{ハル}といふ者^{ハル}。案^{ハル}内^{ハル}もなくそつじ千萬^{ハル}シ。盜賊^{ハル}に紛^{ハル}

れなし。早^{ハル}く帰^{ハル}れと反打^{ハル}かくればア、申^{ハル}シ。是^{ハル}は矢橋^{ハル}栗津^{ハル}の百^{ハル}(二十二才)性^{ハル}共^{ハル}。此^{ハル}比^{ハル}信樂^{ハル}山^{ハル}から虎^{ハル}が^{ハル}出^{ハル}てあれる故^{ハル}。隣郷^{ハル}

が言^{ハル}合せ此藪^{ハル}へ追込^{ハル}シだ。さがさせて下^{ハル}されと口々^{ハル}に呼^{ハル}はれば。修理^{ハル}之助^{ハル}あざ笑^{ハル}ひ。ヤイ虎^{ハル}といふ獸^{ハル}が日本^{ハル}に出^{ハル}た例^{ハル}なし。

途方^{ハル}もない間に合^{ハル}イ口^{ハル}。帰^{ハル}れく^{ハル}と諍^{ハル}ふ声^{ハル}。將監^{ハル}夫婦^{ハル}障^{ハル}子^{ハル}を明^{ハル}ケ。聞^{ハル}たく。天地^{ハル}の内^{ハル}に生^{ハル}する物^{ハル}有^{ハル}るまい共^{ハル}極^{ハル}めがた

し。諸共^{ハル}さがせと鎗^{ハル}熊^{ハル}手^{ハル}提^{ハル}々^{ハル}あゝい^{ハル}く声^{ハル}。松明^{ハル}ふつて中^{ハル}かり立^{ハル}ッる。一^{ハル}トむら竹^{ハル}の下^{ハル}かげにそりやこそ物^{ハル}よと火^{ハル}を上^{ハル}ッれ

ば。あれにあれたる猛虎^{ハル}の形^{ハル}チ。人^{ハル}に恐^{ハル}る、けしきなく背^{ハル}をたはめてぞ休^{ハル}みゐる。

將監^{ハル}横^{ハル}手^{ハル}を打^{ハル}て。アラふしぎや。顔輝^{ハル}の筆^{ハル}の竹^{ハル}に虎^{ハル}。其^{ハル}筆^{ハル}勢^{ハル}に少^{ハル}シもまがふ所^{ハル}なし。是^{ハル}は実^{ハル}の虎^{ハル}にあらず。名^{ハル}筆^{ハル}の絵^{ハル}に

元信ならでは覺なし。ム、。くよめたり聞へたり。日外高嶋の御館騒動の其場所に。四郎次郎有合せ。難を遁れん筆の徳。血汐を以て画し毛色。何れにもせよ証拠には足跡有ルまい。物はためしと百性共。こはぐながら若草を。押シ分ケかき分ケ尋れ共。虎の足形あらざれば書人も書人目利も目利。前代未聞の名イ人やと。心なき土民等も拝ム計りに信をなす。修理之助七尺さつて師匠をはいし。ア、有がたや此虎を見て。絵の道の悟を開き候其印シ。我カ筆先キにてあの虎を消失ひ申べしと。硯引よせ押シ戴て筆を染。虎の順に指あて四五間シあいを置ながら。筆引ク方に随つて頭前脚後脚。胴より尾先に至る迄。次(二十三才)第に消て失けるは。神変術共いひつべし。

將監悦び。ホ、適々。けふより土佐光澄と名付クべしと。印可の筆をあたふれば。

百性共舌をまき。孫子迄の咄シの種。なふあの上手な絵書殿に。よいおやまを十人程書いて貰ひ。金もふけがして見たい。イヤそれよりは手みじかに。借錢乞の帳面シを爰から消て貰はふ物。お暇申スと打笑ひ在所。へくへ帰りけり。

爰に土佐の末弟浮世又平重起といふ絵書キ有。生れ付いて口吃言舌あきらかならざる上。家食しくて身代は。うすき紙子の火燵箱。朝夕の煙さへ一度を二度に追分ケや。

大津のはづれに店がりして妻は絵のぐ夫トは画。筆の軸さへ細望姓登り下りの旅人の。童ずかしの土産物三銭シ(二十三ウ)五銭シの商に。命も錢もつなぎしが。日かげの師匠をおもんじて。半道余りを夫婦づれよなく見舞ぞ殊勝なる。

夫トはなま中目礼計り女房傍から通詞して。ハアまだ是はおよりませぬ。誠にめつきりと暖に日も長カふ成りまして。世間シは花身の遊山シのとざはくく致します。こなたは山かげ御浪人のおつれくをいさめの為。嫁菜のひたしに

豆腐とうふのにしめ。さ、へでも致いたしまして。関寺せみでらが高観音くわんおんへお供ともして。春めく人でも見せませふと。女夫申おんなして居ゐますれ共心で思ふたばかり。道者だうしや時分じぶんで見せはいそがし。せんたく物はつかへる為業しごとにははかいかず。日がな一ち日立たづくみ。何をするやらのらくらと。急いげばまはる勢田せいでん鱧うなぎ只今ただいまぜゝから貰もらひまして。練貫水ねりぬみの大津酒ゆめく（二十四オ）しうござりますれ共。此春からお仕合おしあひが直ただつて。鱧うなぎの穴あなから出る様に。御世ごよにお出でなされませ。ほんにつべこべくとわたしがいふ事ことばつかし。こちの人の吃どもりとわたしがいしやべりと。入いれ合せたらよい比ひな。女夫おんなが一ひと組出来くみませふア、おはもじやと笑わらひける。

奥方おくはうも御挨拶ごあいさつ。よう祝いはふてたもつた。今宵こんやは奇妙きみょうな事有ことつて修理しゆりは名字なづなを救ゆるされ。土佐の光ひかり澄すみと名乗のりぞよ。又平またへも随分ずいぶん筆に心をつきや。我名われなを上あれば則すなはち師匠しせうの名も出る道理う。ノウお徳とくそふじやないか。まあくよい所ところへ酒肴さかな。幸さい々々盃はもいたゞいて。あやかりやいのと有あければ。又平またへ時節じせうと女房にようばうを先まへ押おし出だしせななをつき。我身われみも手をつき頭あたまをさげ。訴訟そつご有あげに見みへければ。女房にようばうお徳心とくしん得えて。誠まこと（二十四ウ）に道みちすがら百性衆ひやくしやうしゆの噂うわさを聞きく。身みは貪おほ也やかたわおと、弟子でしに土佐どさを名のらせ。兄弟子あにでしはうかくと。いつ迄いつまで浮世うきよ又平またへで。藤ふじの花かたけたおやま絵えや。鯰なまこおさへた瓢箪ひやうたんのぶらく生なても甲斐かひなしと。身みをもんでの無念むねんがり。尤なほ共哀あはれ共連つら添そわたしが心の内うち。申まをすも涙なみだがこほれます。奥様おくさま迄までは申まをせしがお直ただの願ねがひは此時このとき節せう。今いま生なまの思おもひ出死でしての跡あとの石塔いしかどにも。俗名そくな土佐どさの又平またへと御一ごいつ言ごんのお赦ゆるしは。師匠しせうのお慈悲じひと計はかりにて涙なみだに。むせび入れれば。又平またへも手てを合あ。将監じやうかんを三さん拜はいし疊たたみにくひ付泣なみだるたり。

将監じやうかんも不便ふべんさの俱ともに心こころは乱みだるれと。わざと声こゑをあら、げ。ヤア又またしてもく叶かなはぬ願ねがひ。コリヤ。よつく聞き此この将監じやうかんは。近江おうみ

の国高嶋の御家来筋。則禁中(二十五才)の絵所小栗宗丹と筆の争ひ。其上高嶋家の重宝雲龍の硯を。宗丹達て所望す。イヤきやつには持せし我にたべと。互に意路を言募。つゝに御前のお聞に立ッて。某は勘当受て此浪人住居。今でも小栗に従ふ。ば富貴の身と栄ふれ共。一人の娘おみつを君傾城の勤させ。子売てくふ程の貪苦を凌は何故ぞ。土佐の名字を惜むにあらずや。修理之助は只今大功有。そちには何の功が有。琴基書画ははれの芸。貴人高位の御座近く参るは画人。物を得いはぬ身を以て及はぬ願ひ。似合た様に大津絵書いて世を渡れ。茶でも吞で立帰れとあいそふ。もなくしかられて。

お徳ははつと力を落しコレ又平殿。こなたを吃(二十五ウ)に産付た。親御を恨さしやれと頼なくく又平も。我カ咽ぶへをかきむしり口に入。舌をつめつて泣けるは理り。見へて不便なる。

折ふし表テに人音して。将監殿やおはする。光信殿と呼はりく抜刀。簀戸押ひらさずつと入将監目早く。お身は狩野の弟子哥之助ならずや。姫君を御供せしか何とく。さればく。館の騒動いふに及ばず存知のごとく。姫君の御供仕り漸切ぬけ爰かしこに忍びしが。主人四郎次郎行方しれず。是第一の氣づかひと心迷ふ其内に。敵手ひどく追かくるシヤ任せて置と。真向に太刀指かざし。向ふ敵の腕骨脚骨嫌ひなく。四角八面に切らせしが。敵は大勢こなたは一人。なんなく姫君奪とられ。下の醍醐は雲谷が館也。(二十六才)伴左衛門を始として門をかためて寄付ず。刀のはがねつづかん迄と。かけ入んとせしがイヤくく。主人の身の上心元なし。跡をしたふて尋る所存。姫君の御事は将監殿。宜しく頼存ると詞も足も血氣の若者。跡をしたふて走り行。

将監心も心ならず。サアく我為の一大事。義賢卿の御頼は爰の事。某が勘当御赦免なきは。いてうの前をいつ迄も隠し置

との御恵。さあれば我直に向はん事も成かたし。いかゞはせんと思案願。

奥方も氣づかはしく。イヤ／＼せいては事のしそんじあらん。殊に其伴左衛門姫君に心をかけ。むたいにくどくと聞上はお命には氣づかひなし。どふぞ弁舌のよき人に將軍家の御意とばかり。取かへす分別はござらぬかと。いふに將監げに誠。せく事はない（二十六ウ）何れもいふてお見やれと。額に小じは頬杖つき各小首かたむくる。

又平何ぞいひたけにつまの袖引せなかつき。指さしすれ共合点行ず。しんきをわかし女房を引のけてつと出。師匠の前に諸手をつき唾を吞込で。コ、コ、此討手には。セ、拙者が参り。姫君をウ、ウはひと取て帰りましよ。將監きつと見。ヤアめんどうな吃りめ。思案半に邪魔入るそこ立てうせぬかと。呵られてもおぢるにこそ。イヤ膝共ダ、談合と申ス。口こそ不自由なれ。心も腕も天下にコ、こはい者がない。拙者が分別致し。叶はぬ時はあんせう助定。あつちへやるか。コ、こつちへ取か。首がけのバ、ばくち。命の相場が壱分五リン。浮世又平と名乗ては。親もない身がら一しん。（二十七オ）命はきだめの芥。名はしゆみせんと釣がへ。悴の時から旧功なし。命にかへて申上るも。師匠の名字を継たい。望ばつかり。拙者めを遣はされて下さりませ。申シ。申シ。さり連は御承引ないか。吃でなくばかうは有まい。エ、／＼うらめしい咽ぶゑを。かき破つてのけたい女房共。去とはつれないお師匠じやと声を。上て泣ゐたる。

將監猶も聞入なく。かたはの癖の述懷涙不吉千万。相手に成て果しなしこれ／＼。修理之助。御辺向つて思案を廻らし奪ひ返し来られよ。早く／＼。畏つたと刀提立出る。又平むづと抱とめマ、マンマン待てくれ。師匠こそつれなく共。弟兄兄弟の情じや。コ、此又平をやつてくれ。殿共いはぬス、ス、すり様。コリヤ又平。某やたけに思ふても師（二十七ウ）

の命は力なし爰を放せ。イ、イ、ヤハ、ハ放しやせぬ。放さねはぬいて突ぞ。ツ突。コ、コ、殺せ。ハツハ、放しやせぬぞ。修理之助も持テあつかひ。放せくと捻合たり。

将監夫婦も氣をあせり。放せくとと、むれ共耳にも更に聞入ず。女房お徳縫り付。あれお師匠様の御意がある。おとましの氣違ひやと。もき放せば女房を取て投。踏付くじだんだふみ。ナ、ナ、何しや。儕迄がキキキ氣違ひとは。エ、女房さへあなとるか。かたわは何の因果ぞやとどうど座をくみ畳を打て声もおします。歎ける心ぞ。思ひやられたる。

将監重て汝よく合点せよ。絵の道の功によつて。土佐の名字を継でこそ。手柄共いふべけれ。武道の功に絵書キの名(二十八才)字讓へき子細なし。ならぬといひ切れば。女房はつと居直りて。サア又平殿覺悟さつしやれ。今生の望ミは切たぞや。此庭の手水鉢を石塔と定こなたの絵像を書と、め。此場で自害し其跡の贈号を待計りと。硯引よせ墨すれば。又平點き筆を染。石面に指向ひ。是生涯の名残の絵姿は苔に朽る共。名は石魂にと、まれと我姿を我筆の念力やてつしけん厚さ尺余の御影石。裏へ通つて筆の勢イ。墨もきへず両方より一度に書たるごとく也。

将監大きに驚入。異国の王義之趙子昂が。石に入木に入ルも和画において例なし。師に勝つたる画工ぞや浮世又平を引かへ。土佐の又平光起と名乗へし。此勢ひに乗つて姫君を奪ひ(二十八ウ)返せと有ければ。はつと計夫婦が悦び又平は。忝し共口吃リ礼より外は涙にくれ。踊り上りとび上り嬉し泣こそ道理なれ。

将監重ねて心功にて心ざしあつけれ共。敵に向かつて問答せん事いかゝあらんと有ければ。女房聞もあへず。常々台頭の舞を好き。わらは諸共つれ脇にて舞れしが。ふしの有ル事は少しも吃リ申されず。サア又平殿悦びに。めでたう舞つて立ッまいか。

ヲツト答^{こたへ}て立上り。古ルキ舞を身の上に。なぞらへてこそ舞^中たりけれ。去程に鎌倉殿。義経^{ぎけい}の討^うツ手を向^{むか}くべしと。武勇^{ぶゆう}の達^{たつ}ツ者をゑらはれし。それは土佐坊。是は又。土佐^{地中}の又平光^{へいみつ}ツ起^きガ師匠^{しせう}の御恩^{ごおん}を報^{ほう}ぜんと。身^中にも応^{おう}ぜぬ重荷^{おもひ}をば。大津の町や。追分^{おひわか}ケの。絵^中にぬるごふんはやすけれど。名は千金^{せんぎん}（二十九才）の絵師^{えし}の家。今墨色^{すみいろ}を上^上ケにけり。かくて女房いさみを付^つケ。又もや御意のかはるべき。はや御^ごシ立^たチとす、めける。ヲ、いしくも申^{ハル}されたり。身こそ墨絵^{すみえ}のさんすい男。紙表具^{ひやうぐ}の体なり共。朽^{くち}てくちせぬ金^{キン}砂子^{すなご}。極^{きよく}ク彩色^{さいし}におとらじといさみす、みし勢^{せい}ひは。ゆ、し。頼^{たの}もし我ながら。通^{あつはれ}絵筆^{えび}のけなげさよ。唐絵^{たうえ}のはんくはい張^{ちやうりやう}良^{りやう}を楯^{たて}についたと思^{おも}しめせ。イサお暇^{いとま}と。立^{フシ}出る。將監^{地ハル中}庭に飛^とんでおり。待^{まち}テく兩人吉^{きさう}左右^{はなむけ}の錢^{せん}別^{わけ}せん。刀拔^{地ウ}ケ間も見せばこそ又平^{へい}が。像^{かたち}を画^{えが}し手水鉢^{てうづばち}二つにどうど切^きわつたり。

一座^{地ハル}の人々軻顔^{あきれ}。女房^ウお徳^{ひつ}恠^こりし。コレ申^こ將監^{しやうかん}様。大事^{だいじ}の門^{もん}ト出^で命^{いのち}づく。身^いを祝^{いは}ふての舞^まうたひ何^{なに}がお氣に入^いませぬ。又平^{へい}殿^{でん}を二つになされしは。不吉^{ふきち}を願^{ねが}ふお心^{こころ}か。但^たシは狂^{きやう}氣^き遊^{ゆう}ばしたか。ホ、ウ（二十九ウ）疑^{うたが}はしくはいひ聞^きさん。其昔^{そのむかし}都誓^{せいくはんじ}願^{ねが}寺^{でら}の御^ご仏^{ぶつ}は。賢^{けん}聞^{もん}子^し芥子^{けし}国^{こく}といひし人。親^{おや}子^こ名^な乗^{のり}りの其印^{そのいん}シ。片^{かた}形^{かたち}宛^{えん}作^{さく}り合^あせし御^ご仏^{ぶつ}なりしに。然^{しか}るに此^{この}仏^{ぶつ}体^{てい}。朝^{あす}暮^く両^{りやう}眼^{がん}シより御^ご涙^{なみだ}頻^{しきり}なりしに。時^{とき}の名^な医^い是^こを考^{かんが}へ。五^ご臟^{ざう}を作^{つく}り込^こみ込^こみだる仏^{ぶつ}体^{てい}なれば。正^{ただ}しく肝^{かん}の臟^{ざう}の損^{そん}じならんと。二つに分^わケて是^こを直^なせば。忽^{たちまち}涙^{なみだ}止^とりし事^{こと}。今^{いま}の世^よ迄^{まで}も割^{わり}符^ふの弥^み陀^だと。隠^{かく}れなし。此^{この}理^りを以^{もつ}て又^{また}平^{へい}が魂^{たましひ}こめし此^{この}絵^え姿^そ。絵^えは吃^{ども}らねど吃^{ども}るは舌^{せつ}。舌^{した}は本^{もと}より心^{こころ}シの臟^{ざう}。其^{その}心^{こころ}シの臟^{ざう}調^{てう}はざる故^{ゆゑ}口^{くち}吃^{ども}る。今^{いま}石^{いし}面^{めん}シの又^{また}平^{へい}を二^{ふた}つに切^きわる此^{この}將監^{しやうかん}。絵^え師^しの手^ての内^{うち}中^{ちゆう}々^さ思^{おも}ひ寄^よラね共^{ども}。コレ此^{この}刀^{たう}は主^{しゆ}人^{にん}より給^{たま}はる名^なイ作^{さく}。其^{その}名^な作^{さく}の奇^き特^{とく}を以^{もつ}て。心^{こころ}シの臟^{ざう}を断^たち切^きたれば。吃^{ども}る事^{こと}はよも

あらじと。いふに又平頭をさげ。ハ、ハ、ハ、有がたしく。いよく首尾よく姫(三十オ)君の。御供申立帰らんと。詞地
すしき一^{ハル}言^ンに。奥方始メ人々も。二度恠^{びつ}りに又平は。我手に我カ口疑はしく。らりるれろ。まみむめも。さしすせそ。
かきくけこ。ありやく直つた。いふはく何をいふ。狸百正棒^{ひきぼう}百本。天王寺のたうく念仏十ヲ申せば仏に成ル。誓
願寺の仏の誓^{ちか}ひ師匠の御恩^{おん}頭^{かぶ}に戴^{いた}。とう。く。く。カラ足ふむ又平は。今ぞ出ッ世の金おとがい。天晴^{あつぱれ}諸人の絵本^{えほん}
ぞといさみいさんで。三重^{さん}へいそぎゆく。

第五 使者の段

地中^{ちちゅう}下^{した}モの醍醐^{だいが}の一^{いっ}構^{かま}長谷部雲^{はせべう}谷^は不破^は伴左衛門。いてうの前を奪^{うば}ひ取^と仰^{うやう}々^く數^{かず}も高提燈^{こうていとう}。裏は高敷表^{やぶ}テは高堀内^{へい}に二人が。
鼻高^{はな}々。末宗雲^{まつむね}谷^はに指向^{しきやう}ひ。此度の騷動^{さうどう}に付^ついて。貴^き(三十ウ)丈^{ぢやう}と我等^{わが}が手柄^{てがら}は世の人のしる所。いてうの前を引捕^ひへ。
將軍義輝公へ奉らば御褒美^{ごほうび}は望^{のぞ}ミ次第。主人義賢殿当分^{へいもん}閉門^{なん}の難^{のが}を遁^すれるからは。是も知行加増^{ちぎやうかぞう}しらるゝは知れた事。両
手に握^{つか}三年め。そこをぬける一^{いっ}思案^{しあん}と。皆^{みな}聞^きかず。ア、其跡は雲^{うん}谷^はが推量^{すいりやう}致^{いた}いた。やはりいてうの前は行方知^しれずと。
將軍へはぬつべりさせ。此所に隠し置^おキ。其間にくどきお、せ手に入^{はいり}との謀^{はかりごと}。なんと目高でござらふが。將軍より崇^{たかし}
有^あル共それは主人の運次第^{えんじだい}。恋人は奥の一^{いっ}間に秘^ひ共^きを付^くけ置^お。随分^{ずいぶん}御機嫌^{おきげん}を窺^{うかが}ひ浮世咄^{うきうた}シ色咄^{しきうた}シ。枕絵^{まくらえ}など引^ひちらし。
あつちから帯^{おび}とい^いて降参^{かうさん}さする鼻^{はな}が了簡^{りやうけん}。是張良^{ちやうりやう}が敵陣^{てきじん}へ笙^{しやう}を吹^ふいて聞^きせし道理。何とうまい牽頭^{けんとう}かくと。登^{のぼ}しかけ
られ身をぐんにやり伴^{ばん}(三十一オ)左衛門。恋の咄^{うた}に目をほ^め。貴様^{きさま}のたいこで我等^{わが}がばち。いかふ脈^{みやく}が高^{たか}ぶつた。雲^{うん}
州^{しゅう}後刻^{ごこく}と咽^{のど}かはかせ。姫^{ひめ}の寝間^{ねま}へぞ急^{いそ}ぎ行^い。

跡^{地ル}に雲谷家来を呼出し。表^調門^シひつしとかためて用心せよ。騒動^{さうどう}の此砌^{みきり}。名護屋山三四郎次郎など、いふ。素浪人^{すろう}のあ

ぶれ者忍び入んもはかられず。性根^{しやうね}を付ケよと言渡し。勝手口^{フシ}へぞ入にける。

既に其夜も。更渡^{ふか}り。菩提寺^{ぼだいじ}の鐘^{かね}こうくと。人も子の刻過る比。足音^{あしおと}ト人音^{じんおと}しとくく。煤^{すす}まふれの高提燈^{たかていとう}。中^{うち}にも頭^{かしら}

と見へたるは又平^{へい}が思ひ付^{おもひ}キ。大紋^{おうち}の袖龍頭卷^{うでづまき}。大津祭^{まつ}りの大太刀横^{おおい}たへ。江戸彩色^{えどざいしき}の頬^ほがまへ。へにはき茶碗^{ちawan}のわれた

るごとく。供人^{くわん}あまた召^めし連^{れん}しは祭^{まつ}りの俄^{にわか}にことならず。屋敷^{やふし}のこなたに立^たはたかり。ヤアく相借^{あいじやく}屋^やの人々。今^{いま}度某師

匠^{しやう}の命^{いのち}に従^{したが}ひ。一世^{いせい}（三十一ウ）一代^{いちだい}の御使^{ごし}を受^うケるといへ共。自力^{じりき}にては覚束^{おぼつか}なく折入^{おれい}ッて頼^{たの}ミし所。相借^{あいじやく}屋^やのよしみを

変^へぜず。贗^{にせ}侍^{せい}の御出立^{ごしゅつだて}。適頼^{あつはれ}もしく。又是成^{なり}ルばりめは某^{たれ}が家の子。絵^えの具解^{ぐかい}の似太^に郎^{らう}と申^{まを}者。しやつめにいさる言聞

せ置^おいたれ共。不器用^{ふきよう}者故氣遣^{きき}はし。コリヤ似太^によ。其糊板^{のりい}をさい槌^{づち}にて。某^{たれ}があるく度^どごとくに。ぐはつたり。く。

く。ヲく其通^きり。椽^{しら}の下^{した}に隠^{かく}れゐて。我^{われ}かげぼうしを相^{あい}図^ずとして。右^{みぎ}キの手をトウ。上^あるならば。其時は今の通^とり。

此名^{このな}をすぐにかげを打^うッといふぞかし。サアいづれもお出^でと。まつさきにすゝみ歩^{ある}ける。各^{おの}も打揃^{うちそろ}ひイサ先^{さき}ッ。お先^{さき}へい

ざざれと。相借^{あいじやく}屋^やの長兵衛^{ちやうべゑ}に誘^{さそ}れて。門^{かど}。際^{さかい}近^きかく成^なければ。

又平^{へい}は力^{ちから}一ッぱい背^せを伸^のし。一^{いっ}越^こ調^{てう}をかすり上^{うへ}。世間^{よこ}シへひゞく坂東^{ばんとう}声^{こゑ}。ヤイく此門^{このかど}内^{うち}へ申渡^{まをわ}す事^{こと}こそあれよつく聞^きケ。

斯^か申^{まを}某^{たれ}は。将軍^{しやうぐん}義^ぎ（三十二オ）輝公^{きこう}の御使^{ごし}イ。則^{すなは}ち高嶋^{たかじま}家^けのお姫様^{ひめさま}シを御迎^{ごむか}い^に参^{まゐ}つたり。早^{はや}く門^{かど}を明^あケろ。明^あケぬにおいては

一^{いっ}つのあんどをけやぶり。あすの晩^{ばん}から事^{こと}をかゝすハツアもんだと睨^{にら}廻^{まわ}し。さい槌^{づち}おつ取^とル門^{かど}の扉^{とびら}碎^{くだ}けよわれよと打^う

たゝき。開^ひ門^{かど}シくと呼^よはりしは城中^{じやうちゆう}響^{ひび}計^{けい}也。

家内俄に驕出し。雲谷始メ伴左衛門。將軍家に聞キおぢして。上下モ改め行義を正し門シひらかせ早御入りと。下馬をなす。

又平は猶臂をはり。十分に伸上り。大太刀横たへ家来共やい。申渡した通り。数万人シの家来共。此館を十重廿重に追ッ取巻。鉄砲石火矢すき間なく取かこめ。某は事によつたら。是に一ト夜さ泊る事もあらん皆そふ心得。先通らふと入れれば。下モ部共皆くはつと入ル内に。似太郎はこそくく椽の下へぞかゞみける。

座敷は燭台び、敷クも。使者を響馳走ぶり。（三十二ウ）

又平声かけヤアく侍イ中。其蠟燭の灯を随分シと。某が跡へお廻しなされ勝ツ手が悪い。惣じて向ふあかりは悪い物。後明りは兵法の第一と心得よと。椽がはをしやちばり返り。右の手をひらりと上クれば。下タ家に似太が氣転のかけ。各びくく驚けば。又平は図に乗て。何ツれも下におる程に。必恟りめさんなど。とつかと直りし有様は仰山。にこそ見へにけれ。

伴左衛門両手をつき。誠に遙々の御出御苦勞千万シ。成ル程姫君いてうの前。此館迄奪かへし置候。先ッ將軍義輝公の御ン仰。貴公の御仮名承はらんとのべにける。ヤアラ其元トのおつしやんしやう共覚ぬ。先ッ人の名をとほゞ我名を名乗ルか軍の法。弁へしらぬ業武者にはあはん。くと。呪廻す。

雲谷傍から笑止がり。イヤ是は御尤。是成は（三十三才）不破ノ道犬が嫡子。同名伴左衛門末宗。かく申ス某は則チ高嶋家の絵所。長谷部の雲谷と申ス者。御使者の御ン名いかゞ申候ぞと。尋られて打點き。ム、其元トは伴左衛門とな。そちらの

わちよは雲^{ハル}谷。エ、むさい名しやな。身共が事は其昔。源の頼光の御内。四天王の第一と名に高き。坂田の金時が末葉。坂

田の金右衛門実高と申スあら者。コレ。此太刀を見よ。是は是。大江山のすつ天童子退治の時。此太刀おのれと抜ケ出。彼^カ蝮^{うば}を切殺せし故。重盛の手に渡り。八股のおろちが尾先キより頭はれし天の村雲の宝劍。素盞鳴の尊。祇園午頭天皇の

御劍なり。又此鐐^{つば}を見よ。こはいか^{ハル}くまつ四角。四角は四方をかたどつたり。惡魔外道を打はらひ。西の海へさら(三十

三ウ)りつと口上。かくの通りでござると出ほうだいなる。長カ口上。

兩人きつと目と目を見合せ。扱^ツはきやつ敵方の廻し者。なぶつてくれんと猶も手をつき。扱々夜中と申御苦勞千萬^{ハル}。先ッ

姫君に逢せ申さんいざ奥へ。家来共案^{ハル}内せよとあしらへば。

又平はしまし顔。御家来中いざ奥へ御案^{ハル}内と。立^{ハル}んとすれど足た^中ず。是は^調く何^{ハル}となされた坂田殿と。各^{ハル}傍へ立

寄^中れば。太刀ひねくつて寄^{ハル}まいぞ。くく。余^調りしやちばつて物を申した故。身内にこぶら返りが致した。ハア、もふよ

い。く^{ハル}と立上り。御両所後刻。く^{ハル}と案内につれ姫の。寢所へゆるぎ行。

雲谷^{ハル}いらつて末宗殿手ぬるしく。今の曲者なせ引とらへ詮義はなされぬぞ。奥へやるは氣づかはしと。かけ入こじりしつ

かと捕^とへ。マア待^調たれよ。それ程の事ぬかる此伴左衛門ならね(三十四オ)共。ハテ高のしれた贖^{ハル}侍。必定四郎次郎め

が廻し者。きやつら百人^{ハル}千人^{ハル}せたり共。小指のはしにも立ッにこそ。疑^{ハル}はしきは此^{ハル}椽の下。さいぜんよりくはつた

く^{ハル}の物音ト。隠し勢^{ハル}イは数しれず。いで家搜^{ハル}しと刀逆^{ハル}手に雲谷諸共。畳板敷^{ハル}キ用捨なく。ぐつぐつと鼻^{ハル}の先^{ハル}キ。智恵^{ハル}

有^{ハル}り顔^{ハル}の鼠突。

奥^奥も俄^俄に女中の声々申シ^色。お二人様。さつきのこはい侍めが姫君様と囁^{ささや}合^あ。泉水^{せんすい}を飛こへ行方しれずと。聞^きクより兩人^{ハル}うろく眼^色コ。それ家来共高提燈^{タカテウ}。鍵^{カギ}よ縄^{なま}よといひ捨て。奥^奥をめがけて走り行^{ハル}。

館^{タテ}の騷動^{さうどう}上を下^上いひ合せたる相借屋^{あいじやくや}。内へは得入^{うけいれ}らぬ藪垣^{やぶがき}の。外^{そと}トに待^{まち}チ受^うケある所^所へ。又平^ウは姫君に綿^{わた}ばうし小脇^{こわし}にかい込^い込^い。

奥^奥を切ぬけ似太^色よ。くといふ声に。爰^{こゝ}にと這^は出る角前^{かくまへ}髪^{かみ}。コリヤ震^{ふる}ふな(三十四ウ)こはい事^{こと}ない。そちは姫君^{せな}背^せにお

ひ藪垣^{やぶがき}こして早^{はや}ふく^地の。声^{こゝろ}は紛^{まが}はぬ又平^色殿^{でん}。く。爰^{こゝ}じやくと相借屋^{あいじやくや}。フン長兵^{ちやうへい}か。八兵^{はつへい}かよい所^{ところ}へと。庭^{にわ}にひらりと

片手^{かたて}にかたくまいてうの前^{まへ}。襠^{うちかけ}ぬぎ捨^{すて}藪垣^{やぶがき}より。渡^わせば任せと受^うケ取^とつて。足^{あし}をはかりに走り行^{ハル}。

又平^地は心^{こゝろ}やすしと姫君^{ひめぎみ}の。振袖^{ふりそで}取^とつて綿^{わた}ばうし。似太^ウに打^うきせ後^{うしろ}にかこふ間^{かん}タもなく。尋廻^{じんわい}つて伴左衛門^{ばんざゑもん}。雲谷^{うんこ}打連^{うちづれ}し走^{はし}り出^で。

ヤアく廣^{ひろ}侍^せめ遁^{のが}さじと。切^きてか、れば抜^はき合^あせ。ぬけつ。くつつてうくく。ゑいく声^{こゝろ}のうろたへ眼^め。姫^{ひめ}こそ大事^{だいじ}

疵^{きず}付^づケなど。あしらふ刀^やは幸^{さい}に又平^{ハル}は。エ、仕損^{しそん}じたり無念^{むねん}やと。跡^{あと}をも見^みずして逃^にけて行^い。

伴左衛門^{ばんざゑもん}姫^{ひめ}を奪^ば取^と手柄^{てがら}顔^{かほ}。コレく雲谷^{うんこ}。貴殿^{きでん}は家来^{けらい}引連^{ひづれ}し跡^{あと}をしたふて詮義^{せんぎ}あれ。我等^{われら}は今宵^{こんや}此君^{このきみ}と。しつぱりの留^{とど}主^め事^{こと}

せふ。いそ^地。(三十五オ)げく^地にうつかり雲谷^{うんこ}。家来^{けらい}つゞけとかけり足^{あし}。こなたはわちく^ウいやじやく^ウをむりやりに。寝^ね

間^まへくと手^てを引^ひて。いきり切^きたる血氣^{けつき}盛^{さか}り。色^{いろ}にあふては目^めも見^みへずふかき。ゑにしぞ。三重^{さんじゆう}へはてしなき。

(次号に続く)